

所知障の研究

——『婆沙論』の不染汚無知説——

佐々木 宣祐

序. 所知障とは何か

唯識学派が煩惱障と所知障の二障を立てることはよく知られている。このうち煩惱障は原始仏教から伝統的に示されている課題であるが、それに対して所知障は唯識学派が新たに提示した課題である。しかしこの所知障とは一体何か、どのような課題性が示されているのか等々に関しては未だ十分研究がなされていない。

所知障を解明しようとする時、その手がかりが『唯識三十頌』安慧釈の序文にある。

また所知障は、全ての知らなければならないことに於ける智が生ずることへの障害となる、不染汚無知である¹⁾。

ここで所知障は不染汚無知であると説明されている²⁾。では不染汚無知とは何か。安慧が唯識学派独自の所知障を説明するために用いていることから、この不染汚無知は唯識学派に限らず広く知られた事柄だとわかる。

この不染汚無知が文献上最初に確かめられるのは『婆沙論』である³⁾。そのため本論は『婆沙論』に於いて不染汚無知がどのようにあつかわれているのかを考察し、所知障研究の一端とすることを目的としている。

1. 不染汚無知とは何か

『婆沙論』は『発智論』の大部な注釈書であるが、注釈の枠をこえ様々な議論を新たに付属させている。この新たに加えられた事柄に不染汚無知の問題もある。それは仏陀とは何者かを問題にする議論に出てくる。仏陀とは何か、どのような智を具えているのか。そのような問題が議論される時に、仏陀の対比として声聞・独覚・阿羅漢・菩薩等が登場し、その差異として立てられるのが不染汚無知である。例えば巻 143 では仏陀と声聞・独覚とはその智に如何なる差異があるのかを

議論しているが、その時に次のように示されている。

有説。若断二種無知，謂染不染，説名為仏。声聞独覚唯能断染，不断不染。故不名仏⁴⁾。他にも見つけることができるが、いずれも仏陀と三乗等との差異を立てる時に不染汚無知がその根拠として示されているのである⁵⁾。つまり『婆沙論』では仏陀と他の三乗等との差異を立てようとした時に、その根拠として不染汚無知という新たな事柄を持ち出したのである。

ではこの不染汚無知とはどのような無知なのか。実は『婆沙論』はその問題を議論してはいないのである。先の『発智論』には出てこない新たな事柄であるにもかかわらず、無知に染汚と不染汚があると述べるだけで、その説明をなさそうとはしていない。もちろんその克服ということに関しても全く話題となっていない。このことから不染汚無知は染汚無知とは違いそれ自体に克服等の課題性がなく、ただ仏陀と三乗等を分ける役割として出されていることがうかがい知れる。しかしこの課題性なき不染汚無知が、ひそかに仏陀観に関して大きな変化をもたらすのである。

2. 仏陀と阿羅漢との差別

仏陀が声聞・独覚・菩薩と異なることは特別不思議なことではない。そこに不染汚無知があろうがなかろうが、仏道の最終的な目的である仏果とその過程である三乗が異なるのは当然である。しかしそれが阿羅漢となると問題は異なってくる。

『婆沙論』では不染汚無知を根拠として仏陀と阿羅漢とが異なることを主張する箇所がある。そもそもの議論は仏陀は何故弟子たちを「痴人」と呵責するのかという問題であるが、その答の一つとして次の説がある。

有余師説。阿羅漢等亦現行痴。不染無知猶未断故⁶⁾。

ここでは余師の説ではあるが阿羅漢は不染汚無知を断じていない存在と言われている。つまり阿羅漢は仏陀ではないのである。

そもそも阿羅漢の名は原始仏教時代では仏陀である釈尊の異名であった。そのことはニカーヤからある如来の十号とよばれる定型句からでも明かである。仏滅後、アビダルマ時代にこの阿羅漢という名称は修道大系上の最高位に置かれるが、最初から仏果と差別して阿羅漢果の名称がつけられたとは考えられない。ところがこの『婆沙論』から仏陀と阿羅漢とは異なることが主張され、その根拠として新たに立てられたのが不染汚無知である。この仏陀と阿羅漢を不染汚無知で分け

る考え方を仮に不染汚無知説と名づけ、それがどのようにして現れたのかを見てみたい。

3. 不染汚無知説

3.1. 異義としての阿羅漢無知説

『婆沙論』以前の文献には不染汚無知に当る言葉は見受けられない⁷⁾。そのため『婆沙論』から不染汚無知説が現れたと考えられる。だが『發智論』にはその原型とでもいえる阿羅漢無知説がある。阿羅漢の位に至っても未だ無知なることがあるという説だが、これには注意すべき点がある。『發智論』ではこの説は異義としてあつかわれているのである。

諸起此見，有阿羅漢。於自解脫，猶有無知。此於五見，何見撰。見何諦，斷此見耶。答謗⁸⁾阿羅漢無漏智見，邪見撰，見道所斷⁹⁾。

ここの五見とは五悪見のことであり、いずれも邪見として否定されている異義である。そのうちの第2が阿羅漢無知説である。これについては『婆沙論』の注釈に由来が示してあり、非常に興味深い。

3.2. 阿羅漢無知説の由来

由来を見る前に『發智論』に対する『婆沙論』の注釈を見ておきたい。

此中謗阿羅漢無漏智見者，謂阿羅漢於自解脫，由無漏智見已離無知。而説猶有無知，則撥無彼無漏智見。是故邪見以為自性¹⁰⁾。

ここで注意すべきは、『婆沙論』が『發智論』の阿羅漢に無知なしとの文意を議論無く了解している点である。そのため『婆沙論』も阿羅漢無知説は対治すべき邪見としている。ではこのことをふまえて『婆沙論』が挙げる阿羅漢無知説の由来を見てみたい。

又彼大天，欲令弟子歡喜親附，矯設方便次第記別四沙門果。時彼弟子稽首白言。阿羅漢等應有証智，如何我等都不自知。彼遂告言。諸阿羅漢亦有無知。汝今不応於己不信。謂諸無知略有二種。一者染汚。阿羅漢已無。二者不染汚。阿羅漢猶有。由此汝輩不能自知。是名第二惡見等起¹¹⁾。

『婆沙論』は五悪見の由来は大天の異義であると説明する。大天とは根本分裂のきっかけを作った比丘と北伝では言われている。その大天の主張を有部系の『發智論』・『婆沙論』は五事の悪見としてあつかうのである。注目すべきはここに不染汚無知説が出てくることである。『發智論』及び『婆沙論』の注釈では、阿羅漢の無知は特にその性質が言及されてはいなかったが、ここでははっきりと「不

染汚無知」と、その無知の性質が言及されている。つまり先に見た仏陀と三乗等を分けようとする『婆沙論』の不染汚無知説と同内容が、ここでは異義者大天の主張として載せられているのである。これは大きな矛盾である。

3.3. 正義としての不染汚無知説

『発智論』からの伝統に依れば不染汚無知説は大天に由来する異義となる。ところが『婆沙論』自体は仏陀と阿羅漢達を差別するために新たに不染汚無知説を用いている。では不染汚無知説は正義と言えるのだろうか。それについて『発智論』があげる邪智という見と、それに対する『婆沙論』の注釈を見てみたい。

若無有見，於五見何見撰。何見所斷。答此非見是邪智¹²⁾。

『発智論』は邪智という邪見に入らない特殊な見があると言う。その説明を『婆沙論』は次のように言う。

問此邪智是何。答此是欲界修所斷中，無覆無記邪行相智。如於机起人想，及於人起机想，於非道起道想，於道起非道想，如是等。（中略）邪智有二種。一染汚，二不染汚。染汚者無明相應。不染汚者無明不相應。如於机起人想等。染汚者声聞獨覺俱能斷盡亦不現行。不染汚者，声聞獨覺雖能斷盡而猶現行。唯有如來畢竟不起。煩惱習氣俱永斷故。由此獨稱正等覺者¹³⁾。

ここでいう邪智とは何か。それは声聞・獨覺が斷ずる染汚ではなく、斷じてもお現行する不染汚無知である。そのようにここでは『発智論』の言葉を注釈しながら、その内容に新たな不染汚無知説を加えて説明をなしている。したがって不染汚無知説は有部の教義として立てられていることがわかる。そのため『婆沙論』は大天の異義を知りつつも、不染汚無知説を正義として立てたのである。このことは『婆沙論』以降同じ有部系の『雜阿毘曇心論』・『俱舍論』・『順正理論』に不染汚無知説が繼承されていることから明かである¹⁴⁾。

結. 所知障の課題

これらのことから次のようにまとめられる。『発智論』までの時代には、阿羅漢に無知があると見ることは異義であった。そのことから逆に仏陀と阿羅漢は同一視されていたとも考えられる。しかし『婆沙論』の時代になると仏陀と阿羅漢はもはや同一とは考えられず、それまで異義とされてきた阿羅漢無知説が不染汚無知説として新たに正義として立て直された。そして『婆沙論』以降、この不染汚無知説は定着した。

不染汚無知説は仏陀とそれ以外の者との差別を明確に立てるものである。しか

しこれは阿羅漢は仏陀ではないとして、仏陀観を大きく変えてしまった。このことは結果的には阿羅漢果を修道の頂点としている伝統仏教上から成仏ということを取り除くことをしてしまった。唯識学派はその成仏ということを取りもどすために、不染汚無知を内容とした所知障を提示し課題としたといえる。

- 1) Tbh., p.15.
- 2) この様な説明は『瑜伽論』菩薩地や『中辺論安慧復註』・『成唯識論』にも見られる。
- 3) 『婆沙論』の不染汚無知と所知障との関連を指摘する研究としては、舟橋尚哉「煩惱障所知障と人法二無我」『佛教学セミナー』第1号, 1965.; 白館戒雲「ブッダパーリタと『無畏註』の年代」『佛教学セミナー』第54号, 1991.; 池田道浩「瑜伽行派における所知障解釈の再検討」『駒澤短期大学佛教論集』第6号, 2000. がある。なお白館の研究には、玄奘訳の『婆沙論』には所知障の語が1箇所出てくるが旧訳にも後の有部系論書にも出てこないため、所知障の初出であるとは言えない旨が記されている。
- 4) T27, p.735b.
- 5) T27, p.887b, T27, p.735b.
- 6) T27, p.78b.
- 7) 旧訳の『阿毘曇毘婆沙論』にも不染汚無知の用語は確認できる。
- 8) 大正は「諸」、宮内庁・聖語院は「諦」だが、『婆沙論』中の引用に順って「謗」とする。T27, p.510b.
- 9) T26, p.956b.
- 10) T27, p.510b.
- 11) T27, p.511b.
- 12) T26, p.919b.
- 13) T27, p.42bc.
- 14) T28, p.921bc, Akbh., p.1, T29, p.329a, T29, pp.501c-502a.

〈文献略号〉

Akbh.: P. Pradhan, ed., *Abhidharma-kosha bhāṣya of Vasubandhu*, Tibetan Sanskrit works Series, vol. VIII, K.P. Jayaswal Research Institute, Patna, 1967.

Tbh.: Sylvain Lévi, ed., *Vijñaptimātratāsiddhi, deux traités de Vasubandhu, Viṃśatikā Accompagnée d'une explication en prose et Trīṃśikā avec le commentaire de Sthiramati*, Paris, 1925.

T: 大正新脩大藏經

〈キーワード〉 所知障, 不染汚無知, 『婆沙論』, 阿羅漢

(大谷大学大学院)